

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02434

研究課題名(和文) 認定こども園教育・保育カリキュラムの開発：地域・社会に開かれた教育課程の視点から

研究課題名(英文) Opening ECEC center and its curriculum to the community and society

研究代表者

宮里 暁美 (Miyasato, Akemi)

お茶の水女子大学・お茶大アカデミック・プロダクション・寄附研究部門教授

研究者番号：40738134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「地域・社会に開かれた教育課程」の視点から認定こども園における教育・保育カリキュラムを開発することである。とくに本研究では「教育標準時間外」(1号認定児降園後の夕方の時間)の保育カリキュラムの可能性を重点的に探求した。具体的には、(1)全国の認定こども園の教育標準時間外の保育の実態調査(質問紙調査)、(2)夕方の時間の過ごし方について国内で先駆的な実践を行ってきた認定こども園の訪問調査、(3)調査結果を踏まえ、認定こども園の教育・保育カリキュラムを開発し、実践の試行、評価、改善、実施、モデルカリキュラムの提示までを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認定こども園では子ども一人一人の登園・降園時刻が異なり、保育時間に大きな幅がある。特に、教育標準時間が終了する午後(夕方)の時間帯になると、降園準備に入る1号認定児、預かり保育に入る1号認定児、保育を継続する2号認定児というように生活の流れに多様性が生じやすく、カリキュラムが複雑になっていた。

本研究では、地域社会に開かれた保育の重要性とこの時間帯の独自性に鑑み、カリキュラム開発につながる一連の調査と実践を通して夕方の時間に重要なファクタを精査した。その結果をビジュアル・ドキュメンテーションを用いて可視化し、学問領域に限らず広く保育に関わる領域に伝えた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop an educational and childcare curriculum for certified ECEC centers from the perspective of "an educational curriculum open to the community and society". This study focused on exploring the possibility of a childcare curriculum after the "standard hours of education" (from early afternoon to evening hours). Specifically, (1) we conducted a fact-finding questionnaire survey of childcare after the standard educational hours at certified ECEC center nationwide, (2) visited several certified ECEC center that have pioneered the utilizing evening hours in Japan, and (3) developed an education and childcare curriculum for certified ECEC centers based on the survey results and presented a model curriculum after pilot executed, evaluated, improved and re-executed that curriculum.

研究分野：保育学

キーワード：保育 こども園 カリキュラム 開発 教育標準時間外

## 1. 研究開始当初の背景

我が国では、少子化が進み、幼稚園（文部科学省管轄教育標準時間 4 時間の保育）に入園する子どもの数が減少する一方で、大都市では保育所（厚生労働省管轄 8 時間以上の保育）に入所できない待機児童問題が連日、新聞やニュースでも取り上げられ、国の緊急課題となっている。平成 27 年 4 月の子ども子育て支援新制度施行とともに開始した、幼稚園と保育所の機能を併せ持つ「認定こども園」は保護者の就労の有無にかかわらず、同年代の子どもたちがともに過ごし育ち合うことが可能となった施設であり、乳幼児教育全体の質の向上や就学前の教育の充実が期待されている。しかし、幼稚園から認定こども園への移行は課題も多く、課題解決は進んでいるとは言いがたい（松井・越中・若林・樟本・藤木・上田・長尾・山崎，2009；渡邊，2014；宮里・石倉・井上・大方・柿沼・神長・駒・齊藤・島田・鈴木・竹田・永井・中田，2016）。

最も重要な教育カリキュラムについても課題がある（越中・若林・松井・樟本・藤木・上田・長尾・山崎，2013）。新たな幼保連携型認定こども園制度では、長時間と短時間の幼児が一緒に過ごす部分を「教育」、それ以上長時間過ごす前後の部分や乳児を預かる部分を「保育」と位置付けている。しかし、認定こども園の教育カリキュラムとして、従来の幼稚園の「教育標準時間」に保育所の「保育時間」を足せばいいという単純な考え方では成り立たないことが見えてきている。認定こども園は、親の就労や生活の状況により、子どもの登園・降園時刻がそれぞれ異なり、子どもが園で過ごす時間が 4 時間～12 時間までと大きな幅がある。どの子どもも同じ時間を過ごす学校の時間（幼稚園を含む）とは異なる中で、一人一人の子どもにとって充実した認定こども園における教育・保育カリキュラムとはどのようなものなのかについては学術的には明らかにならず、実践で試行錯誤の段階にある。

## 2. 研究の目的

上記のように、新制度以降の認定こども園の状況に関する具体的な知見はまだ少なく、カリキュラムの改善や新しいカリキュラム開発に結びついていないと言いがたい。そこで本研究では、「教育標準時間」以降の地域社会に開かれた保育の重要性と独自性に鑑み、この時間帯を「夕方の保育」と名付け、カリキュラム開発につながる一連の調査と実践を計画した。夕方の時間のカリキュラムは従来の幼稚園におけるカリキュラムでは考えられてこなかった時間帯の「教育標準時間外」カリキュラムであり、また、保育所でのこの時間帯のカリキュラムは「教育課程」としては考えられてこなかったという点で、新たな視点からの独自の試みであると言える。

具体的な取り組み内容は以下の通りである。第一に、質問紙調査を実施し、全国の認定こども園の教育標準時間外の保育の実態を明らかにする（研究 ）。第二に、夕方の時間の過ごし方について国内で先駆的な実践を行ってきた認定こども園を訪問し、非構造化面接により得られたデータについて質的分析を行う（研究 ）。以上の研究 ． の取り組みから見えてきた夕方の時間に重要であると考えられるファクタを精査し、東京都内にある都市型の C こども園（在籍園児数 93 名）での実践的検討を通して、新たなカリキュラムの提案を目指した（研究 ）。

## 3. 研究の方法

研究 ①：夕方の認定こども園における保育の実態に関する質問紙調査

「夕方の保育」の可能性を反映したカリキュラム開発に向け、認定こども園の具体的な取り組みの実態や課題を質問紙により明らかにすることを目的として実施した。

調査方法および調査対象 園長や管理職を対象とした質問紙法による調査を計画した。対象園を選定するにあたり、まず、全国の県庁所在地の自治体 HP より認定こども園のリストを収集した。次に「都道府県別の認定こども園数」（内閣府，2019）を参考に、合計 1000 園を各都道府県の認定こども園数に比例するように割りあて、対象園リストを作成した。2020 年 9～10 月にかけて、対象園リストの園長宛てに匿名での調査参加の依頼書とアンケート用紙を郵送した。同 12 月まで回収数は 316 であった（回収率 31.6%）。そのうち、調査への不参加を申し出た園や重要な基本情報が抜け落ちている回答を除き、294 園（私立 89%、幼保連携型 91%）を調査対象とした。調査票では、夕方の保育に関する実態を調べるための複数の質問が含まれていたが、本研究では、自由記述の回答について内容分析を行った。保育を専門にしている研究者と大学院生計 2 名で記述内容の特徴や傾向についていくつかのカテゴリーに分けて要約した。

自由記述の質問内容 夕方の保育の課題、課題を乗り越える工夫、夕方の保育の良さ、新型コロナウイルス感染防止対策実施中夕方の保育について感じたことについて記入してもらった。

研究 ②：夕方の認定こども園における保育の実態に関する面接調査

幼保連携型認定こども園における午後の保育の時間的空間的な利用形態と、それに関連する工夫や問題点について、聞き取りおよび現地調査を行った。2 園の私立幼保連携型認定こども園を訪問し、半構造化面接を行った。責任者に各園の教育・保育概要について確認するとともに、施設を見学し写真撮影を行った。可能な限り平面図を入手し、園屋内外の空間状況を把握した。さらに、夕方の時間帯の園の様子を見学し、午後の教育標準時間外保育の担当者または施設責任

者に、保育の工夫や問題点などについて聞き取り調査を行った。

#### 研究：夕方の保育の実践とカリキュラムの提案

研究および研究の調査を進めつつ、それらから得られた知見をふまえながらCこども園において夕方の保育の実践を行った。そこでの取り組みから見えてきた夕方の時間に重要であると考えられるファクタを精査し、その在り方について考察した。

#### 4. 研究成果

研究（内海・宮里・刑部・山崎・杉山，2021；内海・宮里・刑部・山崎・杉山，2020）

以下に、自由記述の概要を述べる。

(1)課題と対応 夕方の保育の課題については136園から回答を得た（表1）。課題への対応については123園から回答を得た。「子どもの人数が多い」、(無償化に伴う)「ニーズが増加している」という回答は36園であった。それに伴い、人員不足や人員の配置に関する課題、特別な配慮を必要とする子どもに対する支援の必要性が指摘された。人員不足と配置の問題に加え、ノンコンタクトタイム(子どもに直接関わらない時間)の確保の難しさ、スペースの確保や夕方の保育にふさわしい活動内容を組み立てることの難しさから、「家庭的」「ゆったり」とした雰囲気での保育を目指したくてもできていないことが課題として挙げられた。

子どもの人数の多さについては、クラスを分ける、グループに分ける、少なくなったら合同とするなど、集団サイズを変えることで対応しているという回答がみられた。職員配置の工夫として、夕方専任の保育者を置くという回答と複数担任で1日を通して担任が入る、様々な保育者が関わるようにするなどの回答がみられた。時間の確保への対応については、記録や事務作業の見直し、ICTの活用、情報交換の機会の工夫などが挙げられた。

スペースの確保や環境構成・場作りに対する課題は、夕方の保育ニーズの増加がある中で検討していかなければならない点として認識されていた。専用の保育室が欲しいと回答した園が複数みられた一方で、スペースはあるが環境構成が難しい、遊びがルーティン化しやすい点を指摘した園もあった。これらの課題への対応策として、保育室や遊戯室の転用、特別な配慮が必要な子どもが利用する別室の用意、主体的に遊べるコーナーの設置の工夫、体を休める場所作りが挙げられた。また、切り替えのきっかけとしておやつを利用しているとの声や、遊び込めるように、教育標準時間から継続して遊ぶことのできる保育の流れの工夫、夕方ならではの玩具や活動・イベントで変化を出す工夫が挙げられた。さらに、夕方の保育の中で、地域との交流の機会を作る、保護者との連携を高めることが挙げられた。

(2)夕方保育の良さ 夕方の保育の良さについては、132園から回答が得られた（表2）。教育標準時間とは異なった時間帯としての良さを挙げる園が多い一方、教育標準時間とは特に区別しない点を良さを挙げる園も複数あった。家庭的な雰囲気の中でじっくり遊び込める、継続的に遊ぶことができる時間、保育者が活動に変化をつけることができる時間としてとらえられていることが示された。教育標準時間から教育標準時間後も一緒に過ごす中で、様々な関係性が築かれることに良さを見出しており、特に異年齢の交流を良さとして挙げる園が多かった。子どもの思わぬ側面に気づくことができる、子どもの姿を職員間で共有することを通じて幼児理解が深まる、など保育者側にとっても有意義であることが指摘された。

(3)新型コロナウイルス感染防止対策実施中の夕方の保育について気がついたことに関する回答は138園から得られた。回答内容を、「困難や懸念」、「対応や工夫」、「気づきと発見」の3点から検討した。

感染症対策に伴う衛生面の問題の他、保育実践の内容、保護者対応に関する問題が困難や懸念として挙げられたが、環境構成や保育実践については、園の実態に基づき感染症予防のために様々な工夫を凝らしていた。少人数保育や保護者対応のため職員の負担が増加したという報告や未曾有の事態への対応措置について不安や心配が報告された一方、感染症対策のための時間短縮・少人数対応により保育が上手くいくようになった、保育の流れや生活習慣を見直すきっかけになった、子どもとしっかり関わる機会が得られたなど肯定的な報告もみられた。

コロナ禍で三密を避ける対応と身体的接触や仲間関係の大切さ、行事や活動など様々な経験をさせてあげたいという思いとの間での葛藤が示された。このような対立する状況は他の側面でも生じていた。保育時間の短縮に伴い家庭保育の時間が長くなったことにより、子どもの情緒が安定したという園もあれば生活リズムの乱れが生じたという園もあった。このような園の気づきは保護者からの協力や家庭との連携の重要性を改めて認識することにつながったと考えられる。

考察 コロナ禍における夕方の保育の困難は、衛生の面だけではなく、人員配置、場所の確保、保育実践

表1 夕方の保育を実施するうえでの困難

困難の種類	内容
人数の多さ	園児の増加/ニーズの増加
人的環境	人員確保/配置/専任化/連携/保育者の養成と研修
時間の確保	準備/記録/会議などの時間の確保、担任の仕事量が多い
計画の作成	カリキュラム作成/教育時間とのつながり/特別な配慮が必要な子どもへの支援体制
物的環境	スペースの確保/環境構成の難しさ/専用保育室がないこと
保育実践	遊びの種類・マンネリ化/遊び(継続)の保障/(降園時間の違いによる)遊びの中断/異年齢での遊び方/(日によって)メンバーが難し
子どもの健康・安全	安全性の確保/(異年齢による・疲れによる)トラブルの増加/長時間保育の子どもたちの情緒・疲れ・姿への対応
保護者・地域	保護者の意識/降園時の保護者対応/情報発信/地域社会との交流の無さ/近隣からの苦情

表2 夕方の保育の良さ

良さの種類	内容
遊びについて	遊び(じっくり)・遊びこむ/遊び(継続)/遊び(変化)
活動について	活動の変化/活動の継続/特別活動や課外活動
過ごし方・雰囲気について	自由に・個々に/家庭的・ゆったり・落ち着く・緊張感がない
関係性について	関係性の多様さ(異年齢・保育者・仲間・外部)/結びつきの強さ
保育者側が得られたこと	幼児理解が深まる/職員間の共通理解が深まる/教育時間の計画に反映

の課題、家庭や地域とのつながりの減少など、普段のこの時間帯における困難と重なりながら取り上げられていた。困難は相互に関連しており、板挟みとなる問題もいくつか指摘されていた。しかし、コロナ禍での夕方の保育に関する工夫を通じて、少人数での保育の良さに気づくことができたり、家庭との連携や保護者理解を深める必要性に気づいたりすることが可能になったと考えられる。子どもや保護者に共感を寄せ、問題ではなく可能性としてとらえるデザイン思考が生まれている状況が明らかとなった。

研究（山崎・刑部・内海，2020）

夕方保育に関するインタビューの内容（保育者の発話）と、各園が作成した夕方保育に関わる資料をもとに、(1)時間設定と(2)場所作りの二点から、各園の工夫と問題点を整理した。なお、以下に挙げる発話内容では、冗長な箇所について調査者による修正が加えられている。

(1)時間設定 教育標準時間から時間外への移行に関して、専任保育者や場所移動の有無によって、問題となる事項が異なっていた。午後専任保育者のいるA園では、午前担当者と午後担当者間での連携が配慮事項となっていた。例えば、A園では降園バスの発車間隔に生まれる時間を連携の時間とし、情報を共有する際の工夫が述べられた。

立ち話のような形で、13時半で1コースの子どもたちがみんな帰るんですけど、でもそのあと2コースの子たちが残るので、遊んでるんです。普通に外とかで、園庭で遊んだりするので。その園庭で遊んでるところとかに行くと、遊びながらにはなっちゃうんですけど、今日誰々ちゃんと誰々ちゃんと誰々ちゃん‘ゆうやけ’だけど、どんな感じだったかなとか。怪我した人とか、保護者への伝達事項とか、体調面とか、最低限のこともやり、ご飯どうだったとか、日中、最近どんなことして遊んでるとか、夕こういう姿があるんだけど日中はどうなのかなとかっていう風に聞いたりしている。（A園）

B園では、教育標準時間外保育への移行と午睡の時間帯の重なりへの対応が留意されていた。

保護者の方からどういうご家庭での生活ぶりなのか、午睡をしていて夜が10時11時になっちゃっているといったことも聞き取りながら、週末にお昼寝をしていないっていうと、そろそろお昼寝をしなくても日中は過ごせるかなっていうこと。うちの園は3時までが教育標準時間なので、お昼寝するお子さんは、1時になったときに、教育標準時間からはずれてするんですね。なので、周りはしていないのに僕たちだけっていうふうな思いが強く、最初はあるんですが、やっぱり子どもとちゃんと話をして、夕方ぐずぐずしてない？とか、ご飯食べないで寝ちゃうってことはしないの？って、子どもにも聞き取りをすると、ある。じゃあ体がまだしっかり休みたいって言うてるから、お昼寝したほうがいいよねっていうふうに、かなり真剣にちゃんと説得っていうか、わかるように話をして、ご家庭でも話をすると、本人はすんなりと午睡を受けますね。4歳はもうわかってきているので。（B園）

(2)場所作り A園では夕方の時間に地域の近隣住民や保護者の参加、日没への感受性を誘う環境作り、遊び活動をもとにした部屋割りを行うことで、夕方保育に家庭性を担保していた。

夕方ってなると一人の時間も大事にしてるので、絵本を一人でゆっくり見るっていうのは大事だなっていうのはあるなって思うと、絵本は絵本の部屋を作りたくて、理想としては一人なり二人なりゆっくりソファに座って、読めるといいなっていう空間にしたいっていうのがあって。...ここは昨日も一人地域ボランティアの人が来て編み物をしていただいていたんですけど、ここって一番人が通ったりする。地域ボランティアがいるここに、今日何してんだろうみたいな感じで立ち寄って、見たい人は見たりとか、ちょっとチラッと見たけど、まあいいいいやみたいな人ができるように。（A園）

4・5歳児クラスの2号認定児が教育標準時間は保育室、教育標準時間外は広いホールで過ごすB園では、移動の際や環境について安定感を得るための工夫の必要性が指摘された。

4・5歳児の2号認定のための保育は専用の保育室がないため、教育標準時間の行事によって使用する場が異なり、安定しないことがある。ホールの広い部屋をランチルームとして、昼食やおやつを食べるようにしているが、広過ぎて仕切りが上手く作れていない（B園）

ここは教育標準時間内に制作をして、いろんなものを残しておく、午後の時間に全然クラスの子じゃない子たちも来て、ちょっと教育標準時間の先生たちは嫌だなって思うところなんです。なので、午後はホールで過ごすっていうことになる。でもホールだともうものすごく騒がしい中でなので、そこがもうちょっと何とかならないかと。（B園）

以上のように、教育標準時間外保育における問題は、それぞれの園の施設や定員、保育者の配置形態が複雑に関わった結果として生じており、その改善策もまた、それぞれの園独自となることが示唆された。質問紙調査の結果からも、それらは教育標準時間外保育を構成する園児、保育者、施設設備、遊具や教材を総合的な視点からとらえることは必然である。しかしながら、園外の散歩や地域の人々との交流が困難となったコロナ禍においては、夕方の午睡や降園時刻に代表されるような多様性への対処に、子ども達の園内の各場所への滞在と場所間の移動がカギとなってくる可能性が見出された。

研究（宮里・刑部・内海・山崎，2021；刑部・宮里・内海・糸原・山崎，2021；宮里・内海，2021；山崎，2021）

(1)夕方の保育の実践 C園では、教育標準時間外保育について他園の先進的な取り組みについて積極的に情報を収集しながら、自園の特性を活かした実践を模索してきた。まず「異年齢の関わり」「地域社会で行われていた遊びの再生」「様々な人やものとのつながりを活かす」「日暮れから夕暮れへの流れに沿う」ことを指針とすることを確認した上で、当該園には「教育標準時間の保育とそれ以降の保育を同一のスペースで行う」「担任が教育標準時間外の保育も行う」という2点について課題を抱えていることが浮かび上がってきた。

「教育標準時間の保育とそれ以降の保育を同一のスペースで行う」については、当該園では同一スペースの中で保育内容を変える必要があった。そこで、こども園玄関前のスペースを15時半から1時間ほど遊び場として活用した。この場所には、隠れる、走り抜ける、段差がある、土・植物・昆虫がある、乗り物遊びができるなど、迎えに来た保護者のまなざしのもと、地域での路地裏遊びのように様々な子どもの自発的な遊びを担保できることがわかった。開園6年目においてもこの場所は夕方の時間帯の遊び場として定着していた。

また、園では3~5歳児クラスの保育室として2階のオープンスペースを使用しているが、夕方の時間帯は、子どもの数の減少に合わせて、活動に使用するスペースを縮小した。使用する場所としない場所の境に衝立を配置することで、子ども達が「今の居場所」を直観的にわかるように工夫をした。この使用形態は2021年においても基本的に続いていた。保育者による2階保育室レイアウトの時間的変遷から、時間の経過とともに利用場所が狭くなっていくことが示された。ただし、利用場所を限定することに関しては、「人数に合わせたスペースの減少」を最終目的にしているわけではない。「遊びを保つために適切なスペース」という視点から、衝立だけではなくその時々状況にあった家具によってゾーニングを行い、時には子ども達が自らそれを実施していることもあった。

子どもによる夕方の時間のデザインという観点では、開園3年目の時点でも夕方の時間にどのようなことをしたいのかを子どもに聞く機会を設定し、プランへの子ども達の参加を積極的に取り入れている。この機会から始まった活動が、隣接する大学構内での夕方の散歩である。夕方の散歩では、教育標準時間内とは異なるこの時間特有の自然の事象との経験が可能となり、長時間保育にメリハリを与えている。

教育標準時間外や預かり保育に対して、教育標準時間とは別の空間を必要とする声は多い。しかし、部屋数の多さや広い空間が必ず教育標準時間の充実を生み出すわけではない。部屋を変えることで、園児が使用するものが変わること、子どもの没頭を断ち切ることもある。園児それぞれの私物の運び方も検討しなければならなくなる。当該園では、教育標準時間内の前後で部屋が変わらず、かつ3~5歳児の保育室はワンフロアとなっている。各年齢クラスのゾーンが定められているが、出入りが自由となっており、自分の居場所と他のクラスの子どもの居場所の境界は緩やかに存在する。こうした特徴を活かして、午前に経験した活動を夕方の時間に再び自分のペースでじっくりと取り組むことが可能になっていた。

保育者の配置担形態について、C園では学級担任が教育標準時間外の保育も担当していた。開園3年目の時点での具体策として、学級担任群の中の1名を中遅勤務とし、夕方の保育をコーディネートする役割を担えるようにした。これにより午後の勤務の非常勤職員や他の担任と連携して保育を進めることが可能になった。教育標準時間外の担当配置についてはその後、どの担任もがコーディネーターとしての役割を持つようにする形態など、保育者と子ども達が、心地よく充実した時間を過ごせる形を探り続けている。ポイントは以下の二点である。

第一は、教育標準時間から時間外への移行にあたって常勤が何をどのように切り替えるのかである。C園では、これまでの教育標準時間外の保育を通して、教育標準時間との違いの一つとして、夕方の保育では、保育者が必要以上に「直接的に」関わらないこと、夕方子どもたちの様子を観察しながら、一人ひとりの教育標準時間内での活動を想起し咀嚼することが大切であると考えるに至った。第二は、夕方から勤務する非常勤保育者の再評価である。C園では保育研究者が夕方の保育時間を撮影しており、年数回、保育者とデータを交えて議論する機会を設けている。その動画で、非常勤保育者Aが、子どもと遊びながら室内の掃除や片づけを行うふるまいに注目した。Aは子どもに対して自分から何かを提案するような関わり方を基本的にしておらず、先述の必要以上に直接的に関わらないという一つの居方であるように見えた。夕方からいる保育者だからこその子どもとの関わりをもっと積極的に評価することは、この時間の充実にもつながるものとして、保育担当については検討の余地があると考えられる。

(2)カリキュラムの提案 研究 ・ および実際の夕方の保育の実践から得られた知見を発信するため、紙媒体およびデジタルでの冊子を作成した。この冊子では、年齢、時間帯、人、場所など複数の観点から、家庭的で自然と人との出会いを大切にしたい午後の教育標準時間外の過ごし方の事例を提案している。また、地域との関わりや夕方の保育について先進的な取り組みを行っている認定こども園の実践も、視覚化ドキュメンテーションであるグラフィック・レコーディング「絵記録」の手法を取り入れて、報告している。その上で、夕方の保育の「コツ」として、それぞれの没頭を支える、家庭的雰囲気をつくろぐ、自分で決める生活、屋外での時間という4つの視点からカリキュラムを作っていくことを提案した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山崎寛恵	4. 巻 -
2. 論文標題 認定こども園における夕方の過ごし方：地域・社会に開かれた教育課程の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 小さなこども園の大きな挑戦ー子どもたちの「やりたい！」が発揮される生活ー 2016-2020年度実践報告書	6. 最初と最後の頁 97-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 内海緒香	4. 巻 第118巻 第4号
2. 論文標題 実践ファイル 第3回お茶大こども園フォーラム報告 実践や体験を通して語り合い学び合う	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 幼児の教育	6. 最初と最後の頁 27-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮里暁美	4. 巻 85
2. 論文標題 保育現場が心理学に期待すること（特集 保育と心理学：新しい関係を目指して）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理学ワールド	6. 最初と最後の頁 17-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 川嶋円香・刑部育子	4. 巻 69
2. 論文標題 子どもと関わることに對する抵抗感はどこからくるのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本家政学会誌	6. 最初と最後の頁 811～819
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11428/jhej.69.811	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 刑部育子	4. 巻 154
2. 論文標題 アートのまなざし(視点)が保育を変える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 31
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計48件(うち招待講演 26件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 子どもの「やりたい!」が発揮される生活一環境や援助の在り方ー
3. 学会等名 第6回お茶大こどもフォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡南愛梨・杉山沙旺美・刑部育子・宮里暁美
2. 発表標題 「まち」で暮らしている子どもたち - お茶の水大学の教育環境と子どもたちのかかわりから - (1)
3. 学会等名 三菱UFJ環境財団寄附講義2021年度シンポジウム「お茶大×SDGs」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 杉山沙旺美・岡南愛梨・刑部育子・宮里暁美
2. 発表標題 「まち」で暮らしている子どもたち - お茶の水大学の教育環境と子どもたちのかかわりから - (2)
3. 学会等名 三菱UFJ環境財団寄附講義2021年度シンポジウム「お茶大×SDGs」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 刑部育子・宮里暁美・内海緒香・糸原淳子・山崎寛恵
2. 発表標題 夕方の保育の探究：認定こども園における教育標準時間外のカリキュラムの検討を通して
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会（自主シンポジウム）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮里暁美・内海緒香
2. 発表標題 夕方の保育の探究 認定こども園における教育標準時間外のカリキュラムの検討を通して 全国調査の結果とAこども園の実践から
3. 学会等名 日本乳幼児教育・保育者養成学会 第2回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内海緒香，宮里暁美，刑部育子，山崎寛恵，杉山沙旺美
2. 発表標題 夕方の保育の探究 認定こども園における教育標準時間外の保育に関する調査報告
3. 学会等名 日本保育学会 第74回大会 2021年5月（ポスター発表）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大森杏菜・宮里暁美
2. 発表標題 子どもとともにつくる保育～いちよう会議プロジェクト～
3. 学会等名 日本保育学会73回大会（ポスター発表）
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 宮里暁美・鮫島良一・宮里耕太・伊藤幸子・西山萌・志知紗矢香・古川史子・星野愛
2. 発表標題 「創る」が身近にある保育環境の意味を探る(1)～「創る」は保育に何をもたらすのか～
3. 学会等名 日本保育学会73回大会(ポスター発表)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 新型コロナウイルス感染症禍における保育について
3. 学会等名 新宿区立幼稚園副園長・主任会研修会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 一人一人が輝く保育実践
3. 学会等名 静岡市保育士会ふたば支部会 第45回グループ別研究発表(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 あそびで育つこどもたち
3. 学会等名 さいたま市幼児教育の指針WEBセミナー(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 子どもへの食育
3. 学会等名 一般社団法人 家庭まち創り産学官協創ラボ オンラインシンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 刑部育子・内海緒香・宮里暁美・山崎寛恵
2. 発表標題 「夕方の保育」を考える
3. 学会等名 第5回お茶大こども園フォーラムオンデマンド分科会4
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内海緒香・宮里暁美・刑部育子・山崎寛恵
2. 発表標題 認定こども園における「夕方の保育」の可能性: (1) アンケート調査の結果から.
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会 (ポスター発表)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山崎寛恵・刑部育子・内海緒香
2. 発表標題 認定こども園における「夕方の保育」の可能性: (2) 3園の事例から
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会 (ポスター発表)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 刑部育子
2. 発表標題 実践×講話×対話×絵記録 社会の中にある保育とは?
3. 学会等名 第4回お茶大こども園フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tsuchiya, K., Gyobu, I., Miyasato, A., Utsumi, S., & Yamazaki, H.
2. 発表標題 Exploration of STEAM framework through 'light table' with young children and teachers.
3. 学会等名 OMEPA Asia Pacific Regional Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroe Yamazaki
2. 発表標題 Sharing from Japan I :Early Childhood Education and Care (ECEC)
3. 学会等名 Agenda of Primary Daycare improvement workshop (3 months -3 years) Leads to Excellent Breastfeeding Learning Center (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akemi Miyasato
2. 発表標題 Sharing from Japan I :Early Childhood Education and Care (ECEC)
3. 学会等名 Agenda of Primary Daycare improvement workshop (3 months - 3 years) Leads to Excellent Breastfeeding Learning Center (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 “場”がひろげる遊びの世界
3. 学会等名 第72回日本保育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮里暁美・森永路子・大川智砂奈・千葉綾子・三ツ橋ゆり・川口耕平 渡辺勇貴
2. 発表標題 子どもが育つ場の検討(1)：創る・遊ぶ・変わる園庭
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 幼児期に育てたい資質・能力について：子どもの姿から考えてみよう
3. 学会等名 令和元年度神奈川県保育教諭及び保育士向け研修会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 幼児期の教育の未来を展望する：子どもの「やりたい！」が発揮される生活
3. 学会等名 第57回北海道国立幼稚園・こども園教育研究大会第3ブロック大会講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮里暁美・刑部育子・山崎寛恵・内海緒香
2. 発表標題 預かり保育：『くつろぐ』ってどういうこと？
3. 学会等名 第20回全日私幼連東京地区教育研究大会 第8分科会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 心と体の健康教育：日本の乳幼児教育の実践から
3. 学会等名 中国上海国際幼児教育フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 心を育む保育環境
3. 学会等名 高知県教育センター「保育技術専門講座」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内海緒香
2. 発表標題 認定こども園における研修のありかた
3. 学会等名 特別区人事・厚生事務組合教育委員会 「認定こども園における研修の在り方」に関する講義・演習（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内海緒香・川島雅子
2. 発表標題 日本の食育とお茶大子ども園の実践活動：豊かな食体験により食の喜びを育む
3. 学会等名 お茶の水女子大学（子ども学コース）主催 華東師範大学幼児教育学科との研究交流（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮里暁美・内海緒香・高橋陽子
2. 発表標題 小さな子ども園の大きな挑戦
3. 学会等名 第3回 お茶の水女子大学子ども園フォーラム分科会4
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内海緒香・川辺尚子
2. 発表標題 園環境が変わると保育が変わる！
3. 学会等名 第3回 お茶の水女子大学子ども園フォーラム分科会7
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Utsumi, S., Miyasato, A., Gyobu, I. & Yamazaki, H.
2. 発表標題 Extracurricular hours in education and care: Toward the development of early childhood education and care center curriculum that is open to the community and society
3. 学会等名 OMEP Asia Pacific Regional Conference 2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 遊びの中の学びを考える
3. 学会等名 幼児・遊び中心の保育を支援するための中央研修 韓国教育部・育児政策研究所（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 子どもの育ちを考える
3. 学会等名 広島県内幼稚園・保育園連絡協議会セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 楽しい保育を裏付けるアイデアいっぱいの記録
3. 学会等名 群馬県私立幼稚園・認定こども園研究委員研修会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 ツクル×アソブ×イノチと出会える園庭
3. 学会等名 国際校庭園庭連合20 日本大会(横浜)（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 幼児期の教育の在り方について
3. 学会等名 上海復旦大学開催シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 幼稚園教育要領・保育所保育指針・こども園教育保育要領に即した教育・保育について
3. 学会等名 平成30年度第4回幼保合同特別研修会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 子どものやりたいが発揮される環境の在り方
3. 学会等名 第64回富山県幼児教育研究大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 幼児期の教育に求められるもの
3. 学会等名 平成30年度静岡県公立幼稚園・こども園教育研究会中部支部「教頭・主任研修会、教員研修会」（招待講演）
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 2歳児の集団施設教育の配慮とは
3. 学会等名 第65回栃木県幼稚園教育研究大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美・内海緒香・山崎寛恵
2. 発表標題 預かり保育：子どもの一日をデザインするという考え方に立って
3. 学会等名 東京都私立幼稚園教育研究大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 幼稚園における教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動について
3. 学会等名 東京都私立幼稚園協会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 子どもが育つ社会環境
3. 学会等名 平成30年度第一回教養教育センター講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 幼児期の発達に応じた保育内容・小学校との接続
3. 学会等名 新潟県保育士キャリアアップ研修（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美
2. 発表標題 日本の保育実践の新展開 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の施行を受けて
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美・村松直人・木内玲子・久保文香・川口耕平・志知沙耶香・三浦ゆり・内野公恵
2. 発表標題 発達の連続性に根ざした保育の在り方についての検討（3）：こども園における2歳児・3歳児の保育実践から
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮里暁美・川辺尚子
2. 発表標題 保育者のわかる・かわるにつながる研修の提案 1・2
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山崎寛恵
2. 発表標題 乳幼児の生活環境と姿勢に関する縦断的観察
3. 学会等名 第7回日本生態心理学会大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計11件

1. 著者名 久保健太・高嶋景子・宮里暁美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 保育内容「環境」	

1. 著者名 宮里暁美・馬場千晶	4. 発行年 2020年
2. 出版社 公益社団法人 美育文化協会	5. 総ページ数 8
3. 書名 美育文化ポケット第27号（美育NAVI訪問レポート25 こどものそばにある「杉浦さん」という空間）	

1. 著者名 宮里暁美・刑部育子・内海緒香・山崎寛恵	4. 発行年 2021年
2. 出版社 お茶の水女子大学	5. 総ページ数 34
3. 書名 夕方の保育についての探究：文京区立お茶の水女子大学こども園の実践	

1. 著者名 柏原栄子・滝澤真毅・笠間浩幸・請川滋大・塩野谷斉・刑部育子・武藤篤訓・中村孝博・吉葉研司・福元真由美・石井光恵・鈴木喜三夫・木村仁・堀口貞子・大場信一・岡田哲・中西寿夫・杉澤廣治	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 183
3. 書名 保育者論[第3版] (刑部担当第4章1節)	

1. 著者名 宮里暁美、内海緒香	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 148
3. 書名 思いをつなぐ 保育の環境構成 2・3歳児クラス編(宮里編著、内海担当第6章)	

1. 著者名 宮里 暁美、内海緒香	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 152
3. 書名 思いをつなぐ 保育の環境構成 4・5歳児クラス編(宮里編著、内海担当第6章)	

1. 著者名 宮里 暁美、内海緒香 山崎寛恵	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 152
3. 書名 思いをつなぐ 保育の環境構成 0・1歳児クラス編(宮里編著、内海担当第6章、山崎担当コラム)	

1. 著者名 木下勇・仙田満・宮里暁美・渡辺英則・Suzan Hamphries・尾上伸一・伊東啓太郎・三輪律江・大豆生田啓友・仙田考など	4. 発行年 2018年
2. 出版社 株式会社ブックエンド	5. 総ページ数 128 (宮里担当24-28)
3. 書名 BIOCITY 76号: 子どものための屋外環境 校庭・園庭から「まち」へ	

1. 著者名 宮里暁美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 メイト	5. 総ページ数 96
3. 書名 保育がグングンおもしろくなる 記録・要録 書き方ガイド (ひろばブックス) ムック	

1. 著者名 汐見稔幸・大豆生田啓友・宮里暁美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 212 (宮里担当113-122)
3. 書名 新しい保育講座2 保育者論	

1. 著者名 無藤隆・浜口順子・宮里暁美・刑部育子・砂上史子・吉川はる奈・岩立京子・吉永早苗・郡司明子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 萌文書林	5. 総ページ数 257
3. 書名 新訂 事例で学ぶ保育内容 領域 表現	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	刑部 育子  (Gyobu Ikuko)  (20306450)	お茶の水女子大学・基幹研究院・教授    (12611)	
研究分担者	山崎 寛恵  (Yamazaki Hiroe)  (40718938)	東京学芸大学・教育学部・研究員    (12604)	
研究分担者	内海 緒香  (Utsumi Shoka)  (60735306)	お茶の水女子大学・人間発達教育科学研究所・特任准教授    (12611)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関